

女子大生の大学観—神戸女学院大学 学生を対象とする意識調査を通して

岡 本 道 雄
國 府 剛
磯 部 卓 三

序

この小論は、女子大生の学生生活および大学観に関する1つのケース・スタディとして、神戸女学院大学学生を対象にして行なった意識調査の報告である。本調査の主要な目的は、まず(1)本学学生の学生生活の実態および学生生活について彼女らの抱いている不安、希望、不満、悩みなどを明らかにすること、同時に(2)彼女らの大学に対する態度、とくに女子大学に対する態度を明らかにすること、そして(3)これらの相互関係を究明することである。

いうまでもなく、学生の生活や大学観は、彼女らの置かれているより広い状況のなかで起るものであり、そのなかでとらえられなければならない。この点でわれわれがとくに重要だと考えるのは、彼女らに対して両親やまたその背景にある社会一般の人々が寄せるところの役割期待である。それは、入学から卒業後の生活にいたるまで、彼女らの生活と意識とを左右する大きな要因であると思われる。しかし、このことは、彼女らの生活と意識がこの役割期待によって規定されてしまうということの意味するのではない。彼女らは、両親や社会一般の人々が抱いている女性観や彼女らに対する役割期待に対して肯定的あるいは否定的に反応するのであり、彼女らの学生生活や大学観とくに女子大観の多くは、このような反応の具体的な現われであると考えられる。しかし、今回の調査においては、両親や社会一般の、女子大生に対する役割意識についての直接的データは得られなかった。したがって、この点に関するわれわれの仮説は、主として日常観察を中心とするインフォーマルなデータに基づいている。

調査の概要

以下に報告する意識調査は、昭和45年12月から昭和46年2月にかけて、神戸女学院大学学生全員に対して行なわれた。調査方法としては、大半のものにつ

いては、キリスト教学その他の必修科目の時間を借用し、質問紙を配布して、その場で回答を記入するよう求める集合調査の方法をとった(約50分)。ただし、1部の学科・学年の学生に関しては、授業時間が借用できなかったのも、質問紙をいったん持帰り、記入したのち、指定した期日までに提出するよう求めた(配票調査)。そのため、これらの学科・学年については回収率がかなり低くなっているが、全体としての回収率は69.1%である(付表1参照)。しかし、集合調査、配票調査のいずれにしても、若干のバイアスは避けがたいことをあらかじめことわっておかなければならない。

質問紙の作成にあたっては、女子大生を対象にしてこれまでに行なわれていくつかの意識調査を参考にしたが¹⁾、とくに本学学生を対象にして行なわれた、溝口、茂、雀部、難波、西山氏らによる諸調査を参考にした²⁾。ただ今回の調査のねらいは、1つのケース・スタディとして、本学学生の生活と大学観とをできるだけ総合的にとらえてみたいということであったので、質問項目もかなり広範囲にわたるものとなっている。また、このことと関連して、学生の意識内容をできるだけ詳しく知りたかったため、自由回答法をかなり大幅にとり入れた。このため、回答率がかなり低くなった項目もある。自由回答の結果は、量化できる範囲のものについては集計した。

質的データとしては、本調査の自由回答から得られたもの他に種々のものがある。たとえば、そのうちもっともフォーマルなものとしては、若干の学生が各々の学生生活について書いてくれた作文などがある。ただし、今回の報告では、意識調査の結果のうち、主として量化できる部分のみをとりあげ、一般的傾向を明らかにすることにとどめたい。クロス集計による、態度相互関係の分析は、質的データの分析とともに、別の機会にゆずることとする。

なお、集計結果は、付表として一括し、文末に掲載した。

家庭の階層的地位

神戸女学院大学学生の大多数は、大まかにいって、中流の上という階層に属する家庭から来ている。この点に関するデータは、今回の調査の場合、学生から得たものだけに基づいているので、すべてが信頼性の高いものであるとはいえないであろう。家庭の階層的地位に関して、本調査によって得られたデータのうち、もっとも信頼性が高いと考えられるのは、家計維持者の職業についてのデータである。これによれば、管理的職業がもっとも多く、次いで商工自営、専門職が多い(図1参照)。これらの職業だけで、全体の8割以上になる。

これに比して、父母の学歴についてのデータはやや信頼性が低いのではないかと思われるが、しかし、父親の学歴に関して、後期高等教育（旧制および新制大学）を受けたものももっとも多いことは明らかであり、このことは注目に価する（47.5%、付表6参照）。このような教育程度の高さは、家庭の文化的雰囲気にも反映しているのではないかと思われる。家族の年収に関するデータは、もっとも信頼性が低いのではないかと思われる。300万～500万というカテゴリーがもっとも多いけれども、全体にやや低めに報告されているのではないかと推測される。

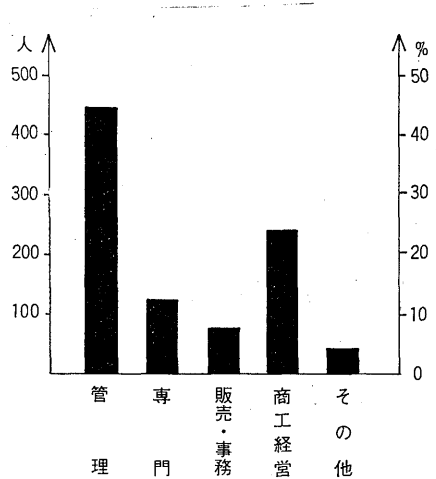
結局、信頼性のもっとも高いと考えられる、家計維持者の職業を中心に判断して、少なくとも8割以上の家庭が中流以上の階層に属するものと思われる。

なお、家族の居住地に関しては、非常に地域性が高く、92%が関西在住である。

大学進学と大学の選択

大部分の学生（83.7%）は、大学に進学するかどうかで迷わなかった、と答えている（付表10参照）。もちろん、これは、彼女らがはっきりとした目的意識をもって大学進学を決意していたということではなく、家庭の階層的地位からいって、大学進学をある程度当然のことと考えていたということであろう。しかし、いうまでもなく、経済的条件だけが大学進学への態度を決定するわけではない。同じく重要なのは、これらの階層の人々の間には、女性についても、大学教育を受けることを望ましいと考えるエートスが備わっていることであろう。直接的データに欠けるけれども、のちにのべるように、ほとんどの両親が彼女らの本学入学に賛成していること、およびその他の間接的データから

図1 家計維持者の職業

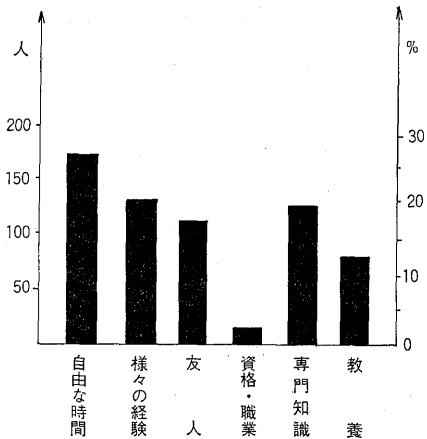


(注) 管理的職業：勤務先100人以上の部長500人以上の課長

考えて³⁾、大学進学ということに関しては、学生と両親の間には、大きな期待の相違はないものと推測される。

さて、大学に進学したことを学生たちはどのように評価しているであろうか。大多数のもの(85.5%)は、進学してよかった、と答えている。逆に、進学しない方がよかった、と答えたものは1.5%にすぎない(付表11参照)。しかし、この点については、どのような理由で進学してよかったのか、という質問に対する回答の内容の質の方がわれわれの注意をひく。自由回答法を採用したため、回答率はあまり高いとはいえないけれども(79.3%)、「自分の自由になる時間ができた」、「色々を経験を広めることができた」といった回答が多いことは興味深い点である(図2参照)。もっとも、一般的にいって、今日の学生が、正規の授業よりも課外活動により強い関心をもっていることや、かれらの態度変容にもっとも大きな影響をもつのは課外活動——フォーマルなものからインフォーマルなものまでを含めて——であることは以前からも指摘されていることであるので⁴⁾、この自由回答の結果もけって予想外というわけではない。ただし、音楽学部学生は例外である。彼女らの間では、「専門を伸ばすことができた」といった回答がもっとも多い。音楽学部学生の専門意識は、彼女らが専門活動につきこむ時間とエネルギーとともに、彼女らの学生生活と生活態度とを、他学科の学生たちのそれとはかなり異ったものにしてしている。

図2 大学に進学してよかった点



次に、大学の選択についてみてみよう。迷わないで本学を選んだ、と答えたものは23.2%である(付表13参照)。当然のことであるが、本学院中高部出身者の間では、迷わなかった、と答えたものが多い(37.9%)。他の大学を受験したか、という質問に対しては、過半数のものが、受験した、と答えている(付表14参照)。受験大学名を記入したのは、そのうちの8割強であるが、記入

された大学を分類してみると、キリスト教主義共学を受験したものがもっとも多く(43.2%)，次いで国公立の共学大学を受験したものが多い(33.6%，付表15参照)。共学の大学を受験したものが、他の女子大学を受験したものよりもはるかに多いことは注目されよう。回答者数は非常に少ないが、音楽学部学生の場合には、他の女子大学を受験したものは1名だけである。これは、専門を決めた上で、大学を選ぶという、彼女らの明確な専門意識と、音楽専攻を置く大学のほとんどが共学であるという客観的状況との結びつきによるものだと考えられる。全体として、他の受験校名を明記したものの中では本学を第1志望としたものと、第2志望としたものがほぼ同数である(付表16参照)。

志望順位は別として、本学を志願し、入学を決心したということは、そこに、何か引かれるもの、いいかえれば誘因があったものと考えられる。本学を選択する際の誘因としてもっとも多くあげられたのは、建物や環境のよいこと、であり、次いで多いのは、世間での評判がよいこと、である(付表17参照)。4分の1以上のものがあげたものとしては他に、小規模であること、推薦入学できること(中高部出身者)、学力が相応であること、などである。これらのうち、小規模であること——これが現実には実質的な少人数教育と結びついているかどうかは問題として——を別とすれば、いずれも本学の教育内容の特色とはあまり関係のないものばかりであることは注目される。本学の重要な特色である、キリスト教主義であること、を選んだものは非常に少ない(8.3%) また、女子大学であること、を誘因としてあげたものも、(14.1%)と少ない。

ただし、上にのべたことは、誘因の選択頻度に関してであって、これから各々の誘因の強度を論じることができないことはいうまでもない。

本学を志願し、入学したいということは、もちろん、本学のすべてがよかった、ということではない。つまり、最終的には本学に入学することを決心したにせよ、マイナスの要素がまったくなかったとはいえない。この点に関しては、自由回答法を採用したため、回答率はやや低い(61.2%)，マイナスの要因として、「女子大であること」、という回答がとびぬけて多いことは注目される(52.2%，付表18参照)。これは、無回答者を含めた全体のなかでも31.9%にあたり、同じことをプラス誘因としてあげたもの(14.1%)をはるかに上まわっている。なお、この回答は、音楽学部学生の間でとくに多い。これは主として、彼女らの専門の性格によるものと思われる。

次に、本学入学についての両親の態度を調べてみよう。今回のデータは学生を通して得たものなので、若干のバイアスがあるかもしれないが、大多数の両親が彼女らの本学入学に賛成であったことはまちがいないことであろう(付表

20, 21参照)。逆に、父親が反対した、と答えたものは2.7%、母親が反対した、と答えたものは1.6%である。賛成理由については、自由回答法を用いたので、回答率はかならずしも高いとはいえないが(父親については、81.3%、母親については83.4%)、父母いずれについても、もっとも多くあげられているのは、「世間での評判がよいから」であり、次いで多いのは、「女子大だから」、「安心だから」である(付表22, 23参照)。「女子大だから」という賛成理由は、父親の場合にやや多いが、その他の回答については父母間の相違はほとんど認められない。「女子大だから」という賛成理由が両親についてかなりあげられていることは、上にのべた学生の態度とやや対照的である。このような相違は、親子両世代間の、女性の役割に関する、もっと一般的な考え方の相違の反映であると考えられる。

両親の意見が学生の本学入学に関してどの程度の影響力をもっていたかについては、今回得たデータからは判定できない。しかし、母親の約4割、父親の約3割が、積極的に勧めた、と報告されていることから、両親の意見が大きな力をもっていた場合が少なからずあったのではないかと思われる。

では、学生たちは、本学に入学したことをどのように考えているのだろうか。本学に入学してよかったと思うか、という質問に対して、肯定的に回答したものは半数をやや上回る程度である(53.0%、付表19参照)。これに対して、他の大学の方がよかった、と答えたものが2割近くいる。他の大学の方がよかった、という場合、何を比較の基準として用いているのかはわからないけれども、かなりの学生がこのように否定的な回答をしていることは重要である。この点は、機会を改めて分析の対象としたい。

学 生 生 活

授業等の課程内活動が学生生活の中心となっていないことは、今日の学生生活の一般的特徴である。このことは、本調査によっても確認できる。たとえば、授業に関係した勉強時間として、もっとも多いのは、1日30分～1時間というカテゴリーである(付表25参照)。2時間以上、と答えたものは2割に満たない。次に、自分の生活のなかで、どんな方面にとくに力を入れていますか、という質問に対する回答をみると、広い意味での勉強という答えがもっとも多い(図3参照、より詳しくは付表31参照)。次いで多いのは、自治会・クラブ活動、けいこごと、専門の勉強である。「広い意味での勉強」の内容は、各々の学生によって、その受けとり方が多少違うのではないかと思われるが、

それが以前のように読書と結びつけられて考えられることは少ないようである。授業に直接関係のない読書時間としては、6割以上のものが1日平均1時間以下と答えている（付表26参照）。

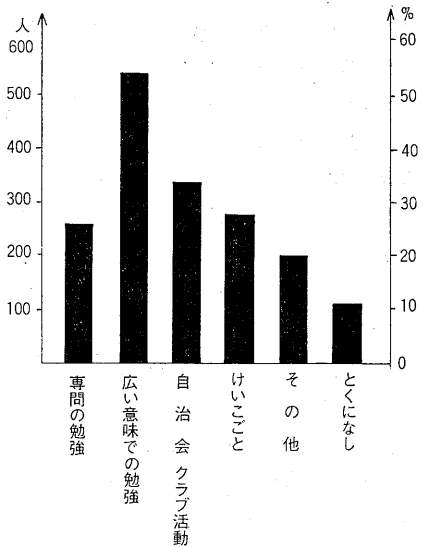
音楽学部学生に関しては、かなり違った結果がみられる。授業に関した勉強時間としては、1日2～3時間というカテゴリーがもっとも多く、また生活の重点も専門の勉強に置いている、と答えたものが多い（56.9%）。

本学の特色であるキリスト教教育に関しては、これまでの調査結果と比較できる項目がいくつかある。ただし、大学での礼拝出席に関しては、昭和45年度以後、出席カード制が廃

止されたので、比較するデータはない。教会での日曜礼拝の出席に関しては、本学社会学研究部の報告（調査実施：昭和35年5月～7月）⁵⁾、および溝口・茂両氏の報告（調査実施：昭和40年7月）⁶⁾などがある。これらの報告と今回の調査結果とを比較すると、時々出席するというものを含めてともかく日曜礼拝に出席することのあるものの割合は86%（35年）、49%（40年）、21%（本調査）と、急激に減少している。日頃の程度聖書に親んでいるかという点についても、前掲の溝口・茂両氏の報告が比較の対象になる。「ひとりで聖書を読むことがありますか」という質問に対して、時々読む、と答えたものを含めてともかく聖書を読むことのあると思われるものの割合は、67%（40年）、42%（本調査）と減少している。ただし、その変化の程度は、教会出席の場合よりも少ない（以上の2点についての本調査の結果については、付表29, 30参照）。なお、各時点における、プロテスタント信者および求道者を合わせたものの割合は、それぞれ26%、19%、8.3%である。

次に、大学における友人関係についてみてみよう。友人関係は、大学における多くの活動、とくにほとんどすべての課外活動が行なわれる場であり、すべ

図3 生活の重点



ての学生にとって極めて重要な意味をもっていると思われる。本学において友人が得られたか、という質問に対しては、肯定的な回答が大多数である(87.1%, 付表32参照)。また、「人生に関して、またものの考え方に関して、本学での友達から影響を受けたことがありますか」という質問に対しても、肯定的な回答が8割強もある(付表33参照)。しかし、「大いにある」と答えたものは約2割である。「人生に関して、またものの考え方に関して、どんな人々あるいはグループからもっとも影響を受けていると思われますか」という質問に対する回答をみると、やはり友達をあげたもののがもっとも多い(34.7%, 付表38参照)。しかし、親という回答もこれに近い(29.6%)。ただし、この質問からは、準拠集団の概念に含まれる主体の側の態度を区別してとりだすことはできない。

では、友人間の会話ではどのような話題がとりあげられているのだろうか。もっとも多いのは、異性のこと(47.7%)であり、次いで多いのは、勉強のこと(46.3%), 大学のこと(41.6%), 人生(41.3%), 世間話(41.1%)である(付表34参照)。勉強のことという回答については、本調査が行なわれたのが期末試験に近い時期であったことを考えると、試験準備に関する相談がかなり含まれているものと思われる。政治・社会問題という回答が非常に少ないことは注目される(8.4%)。このことは、のちにのべるように、多くの学生が女子大学の短所として、政治・社会問題を敬遠しがちという点をあげていることと表裏の関係にある。総じて、公共的な高次元の話題が少ないとする見方もありうるかと思われるが、これは、比較基準がないのでなんともいうことができない。また、話題のタイプからは、会話の内容や交友関係の深さを推測することもできないであろう。

しかし、他方、本学では学生間の連帯が欠けているという批判が以前から、学生自身の口を通してよく聞かれる。のちにのべるように、本調査においても、「本学の悪い点」についての自由回答のうち、学生に対するものとしてもっとも多いのは、「自己中心的である」あるいは「利己的である」という、やや自己批判的な回答である。このような批判には、友人関係そのものの「底の浅さ」に対する批判も含まれているとは思われるが、それは主として、本学における交友関係が、いわゆる「気の合うものどうし」という閉鎖的・排他的性格の強い友人関係であることに対する批判であると考えられる。いいかえれば、小集団からのアウト・プットがなく、学生間のより広い連帯が生まれにくいということが問題なのである。このことは、さきにのべた話題の性格とも密接な関係があるかもしれない。

学生間の連帯の弱さは、自治会活動の不活撥さに典型的にあらわれている。自治的活動の一環として行なわれているクラブ活動に関しては、活撥とはいえないまでも、かなりの学生が積極的に参加しているようであるが、それが、より広い状況における公共的な自治活動につながらないというのが現状であろう。逆に、本学のクラブ活動は、学生の関心と興味を私的な趣味として分極化させる方向にのみ働いている側面をもっているように思われる。もっとも、このような傾向は、本学に限られたものではなく、今日ほとんどの大学において見られる一般的傾向でもあろう。

大学における人間関係としては、友人関係の他に学生と教師との関係がある。学生と教師との関係が、研究・教育活動というコンテクストのなかで展開されることは当然のこととして、多くの学生は、もっと広い意味での教師との人間関係を希望している。本調査で得たデータによれば、7割の学生が、勉強以外のことで教師と話し合いたいとのべている(付表36)。実際にどの程度接触しているかについては、少なくとも個人的な接触に関しては、ごく少ない(付表35参照)。これは男性の教師に関していえば、性の相違と教師の「公平主義的」態度による点も多いのではないかと思われる。

しかし、学生・教師間の関係について、もっとも重要なのはやはり、まず研究・教育活動を通して対話が成立することであろう。授業に対して不満を感じている学生が多いが(付表27参照)、その不満の多くは、のちにのべるように、授業での対話の欠如に向けられている。人数の多い、また包括的な性格をもちやすい概論講義などの授業において、この点で多くを望むのは困難かもしれないけれども、このようなフォーマルな授業が、学生と教師とを含むよりインフォーマルな小集団での研究・教育活動によって補われていくこと、そしてそれがさらに、学生・教師間のもっと広い相互関心に発展し、対話の場がつくられていくことが、もっとも望ましいと思われる。

上にのべたことは、学生生活の具体的な諸局面に関するものであるが、次に、学生たちが各々の生活全体のなかでどのような点で悩みをもっているかを調べてみよう。無制限連記法を用いたので、各々の悩みの「深さ」の程度は知ることができないけれども、「毎日の生活にはりがない」という回答と、「自分の生き方が誤っているのではないかという不安がある」という回答がとびぬけて多いことは注目される(図4参照、より詳しくは付表59参照)。毎日の生活にはりがない、という回答は、自己の生活が外的状況の要求に答えるだけの日常的なくりかえしの生活であるという意識、つまり、主体的にコミットする生活の中心がないという意識をあらわしているものと思われる。また、自分

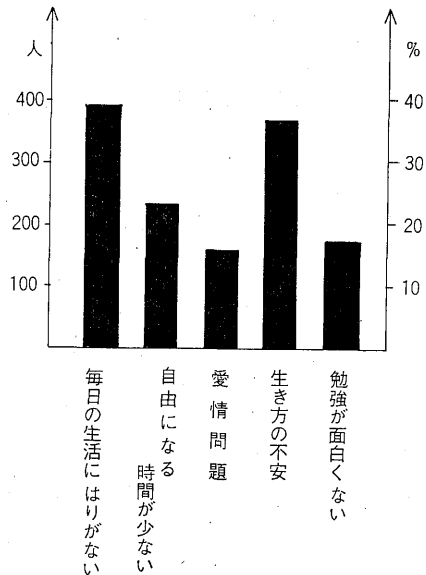
の生き方が誤っているのではないかという不安がある、という回答は、はっきりとした生活目標を見い出せないまま、他律的に日常活動に参加しているという意識、あるいは、漠然とではあるかもしれないけれども、自己のなすべきこと、自己のあるべき姿について何らかの考えをもちながらも、^①「現実」の重みに身をまかせてしまっているという意識をあらわしているのではないかと思われる。これら二つの回答には、内容的に密接な関係があると思われるが、統計的には有意な関連があるとはいえない($\chi^2=0.230, 0.20>$ 危険率 >0.10)。しかし、いずれにしても、このような回答が多いことは、それが彼女らの生活全体に関わる問題だけに、極めて重要な意味をもっている。

もちろん、このような現象は、本学学生あるいは女子学生に限らず、男子学生を含めて、今日の学生一般に見られる共通の現象であると思われるし、それは、青年期の一般的特徴であると同時に、今日の大学のあり方、あるいは、広くいえば、今日の社会のあり方そのものに深く関わる問題であるとも考えられる。しかし、女子学生についていえば、このような共通問題の他に、さらに特殊な問題、つまり、相矛盾する女性観や、女性に対する相矛盾する役割期待のなかで、自己の生き方を確立するという困難な問題、また、女子大学がもっている共通の問題などがあると思われる。これらの点については、のちに簡単にふれるが、より詳しい分析は、別の機会にゆずりたい。

大 学 観

次に、学生が大学というものをどのように考えているのか、とくに女子大学というものをどのように考えているのか、をみてみよう。上にのべたことが、学生一人一人の^②「大学経験」であるとすれば、以下ののべることは、大学に対

図 4 悩み(上位 5 位)

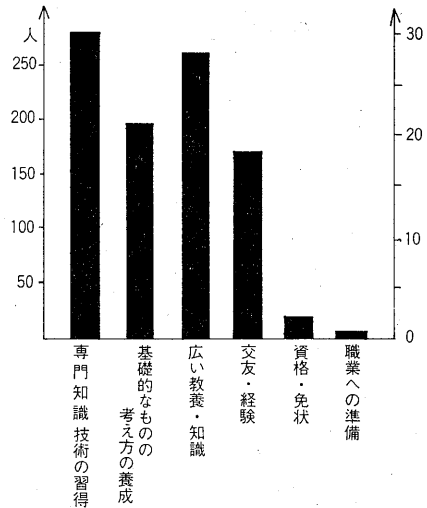


して彼女らの抱いているより一般的な観念であるといえよう。

まず、「大学の意義」として、どのようなものが重視されているかをみると、もっとも重要なものとして多くの学生によってあげられているのは、専門知識・技術の習得である（図5参照、

より詳しくは付表39参照）。しかし、広い教養・知識を身につけること、基礎的な考えを養うこと、いろいろな人と交り、経験を広めること、をあげたものも多く、これらを合わせると、67.4%に達する。これらのカテゴリーは、内容的に重り合うところが多いと思われるが、学生のよく口にする「人間的成長」というより広いカテゴリーにまとめることができるかもしれない。資格・免状を得ること、自分に適した職業につくための準備をすること、をあげた学生は、予想されたことではあるが非常に少ない。総じて、大学を何かのための手段と考える学生は少なく、むしろこのような考え方に反感を抱いている学生が多いのではないかと推測される。

図5 大学の意義(第1位としてあげられるもの)



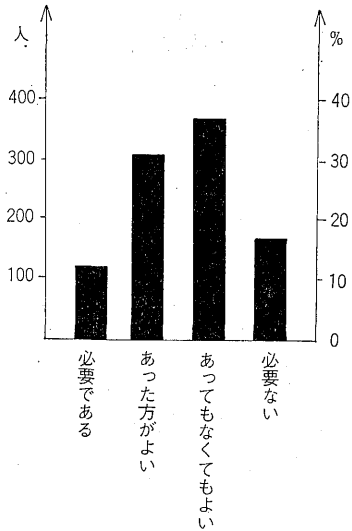
「大学の意義」として2番目に重要なものとしては、「教養」をあげたものがもっとも多い。3番目として多いのは、基礎的なものの考え方を養うこと、である。1位から6位までに順序づけられたものに、仮に5点から0点までを与え、総点を計算してみると、上にあげた4つのカテゴリーはほぼ同じ得点になる。最高は「教養」である。

以上の結果は、さきにもべた学生の「大学経験」とある程度一致していると同時に、若干のずれも見られる。たとえば、一般論としては、専門知識・技術の習得がかなり重視されているけれども、回答者の具体的経験のなかでは、この点に重点がおかれているとはいえない。また、「大学に進学してよかったと思う点」に関しても、専門知識・技術の習得は、それほど重視されてはいない。このような相違の多くは、理念と現実とのずれ、あるいは、「たてまえ」と「ほんね」のちがいを、として解釈して誤りないものと思われる。ただし、音

楽部学生の場合には、一貫して専門が重視されている。

次に、女子大学というものを学生がどのように考えているかをみてみよう。まず、「女子大学は今日必要か」という質問に対しては、必要である、と答えたものは非常に少ない(図6参照、より詳しくは付表42参照)。あった方がよい、あってもなくてもよい、と答えたものが多く、両者を合わせると71.5%になる。しかし、われわれの注意を引くのは、2割近くの学生が「必要なし」と答えていることである。このことは、彼女らが女子大に入学し、現にそこで学んでいるという事実と矛盾する。このような回答者のなかには、両親に勧められたからといった、主として他律的な理由で本学に入学し、あとになってそのことを不満に思っているもの、また、入学動機とは別に、入学後に何んらかの不応や不満を経験したものが含まれているものと思われる。彼女らの女子大無用論は主として、このような経験の反映なのではなかろうか。

図6 女子大学の必要性



さて、原則論とは別に、女子大学に現実的な長所があるか、という質問に対しては、約6割のものが肯定的な回答をしている(付表45参照)。どのような長所があるのか、という点については、家庭的で、静かな雰囲気がある、という回答がもっとも多く(47.5%)、次いで、女性としての能力を伸ばすことができる(34.5%)、異性にわずらわされない(26.2%)、異性に依存せず、独立心を養える(23.5%)の順となっている(付表46参照)。

逆に、女子大学に固有な短所があるか、という質問に対しては、ほとんどのものが「ある」と答えている(94.8%、付表47参照)。その内容については、視野が狭くなる(79.7%)という回答がもっとも多く、次いで、政治・社会問題を敬遠しがち(64.8%)、意欲に欠け、活気が足りない(63.4%)といった回答が多い(付表48参照)。この結果は、他の女子大生を対象に行なわれた調査の報告ともだいたい一致するし⁷⁾、女子大生間の共通した認識であるといえ

よう。女子教育に関するより一般的な質問、つまり、女性に適した大学教育というものがあるか、という質問に対する回答については、やや以外な結果がえられた。「ある」と答えたものは約4割(40.5%)であるが、全くないとはいえない、という回答も多く(43.2%)、両者を合わせると、8割以上になり、逆に「ない」と答えたものは非常に少ない(6.9%、付表53参照)。女子大無用論が18.1%あったことを考えると、この6.9%という数値は、予想されるものよりかなり低いように思われる。

女性に適した職業というものがあるか、という質問に対しては、大多数のものが肯定的な回答をしている(付表54参照)。

これらの結果から考えると、学生の多くは、両性間の相違をある程度までは認めていると思われるし、したがって、彼女らの間に見られる、女子大学に対する否定的な態度は、かならずしも原理的な否定論ではなく、女子大学にありがちな具体的な短所の認識に基づくものが多いのではないと思われる。

以上のべたことは、一般的な大学観および女子大観についてであるが、最後に、本学について彼女らがどのような考えをもっているのか、本学にどのような長所あるいは短所があると考えているのか、という点についてふれておこう。「本学について、よいと思われる点をあげてください。なければ『なし』と、その旨を書いてください」という質問に対しては、12.0%のものが、「なし」と答えていることがまずわれわれの注意を引く(付表49参照)。このような回答は、その判断が何を基準にしているのかが問題であるようにも思われるが、実際は、比較といった次元をまったく越えたところでの、本学に対する何んらかの^{*}失望経験を反映しているのではないと思われる。なお、「悪い点」についても同形式の質問を試みたが、これに対しては「なし」と答えたものは3.0%である(付表50参照)。

本学のよい点として多くの学生によってあげられているのは、「環境がよいこと」、「小規模であること」、「雰囲気が良いこと」などであるが、これらは、さきにもべた「入学を決心する際の誘因」とだいたい同じである(付表51参照)。

一方、悪い点を見ると、女子大学の共通の欠点と思われる諸点があげられているのは、本学も女子大学のなかでの例外ではないことを示している(付表52参照)。たとえば、学校の全般的傾向としての保守性、学生の自主性の制限、学問の追求の厳しきの欠除、活気のなさ、などがそれであろう。教育内容については、優れた教授がない、といった教師の質に対する不満、カリキュラムに対する不満、授業が一方通行である、授業内容が古めかしい、といった授業

に対する不満が上位を占めている。その他特徴的なのは、出席をきびしくとりすぎる、といった、形式主義への批判である。

学生自身の問題点か、学校側の悪い点かは疑問であるが、このほか悪い点としては、学生が利己的、無気力であること、学習意欲の欠如、政治的・社会的問題への無関心、ひいては視野の狭さ、といった諸点が上位を占めている。これらは、さきにみた、「女子大学の短所」の内容とだいたい一致する。

良い点あるいは悪い点としてあげられた項目に関して、われわれの印象に残ることは、同じ事柄が観点の相違により、良い点としてあげられる場合と、悪い点としてあげられている場合とがあることである。たとえば、学生の質を良いと答えたものが10%いるが、一方では、本学の学生はプライドが高すぎるとするものも3.4%いる。また、キリスト教にふれることができることを良い点とするものが9.8%であるのに対して、学内におけるキリスト教の形式化を批判するものも4.6%いる。これらは良い点としてみるものの方が多い場合であるが、次にあげるのは、悪い点としてみるものの方が多い場合である。たとえば、本学が学生の自主性を尊重しているか否か、学生・教師間の交流の有無、学問追求の厳しきの有無、教師の質の良否、学生間の相互不干渉の評価、女子大的特徴、をどうとらえるか等に関しては、否定的な意見の方が多い。しかし、これらの点は、本人の問題意識や関心のあり方、欲求水準等に関連し、また同調型、か批判型、かによって異なるといえよう。

全体としていえることは、少なくとも学生目からすれば、本学も女子大学のなかの例外ではないということ、したがって、また彼女らの女子大学観の多くは、本学での彼女らの経験と、本学に対する彼女らの評価と密接な関係にあるということである。

卒業後の生活

最後に、学生たちが卒業後の生活をどのように考えているのかをみてみよう。今回の調査では、具体的には就職と結婚という2つの点について彼女らがどのように考えているのかを調べてみた。

まず、就職についてみると、約3割の学生が是非就職したい、と答えている（付表56参照）。いい職があれば、就職したい、と答えたのも約3割である。両者を合わせると6割強になるが、この結果は、本学社会学研究部の報告（調査実施：昭和35年）とほとんど変わっていない⁸⁾。就職するつもりはない、と答

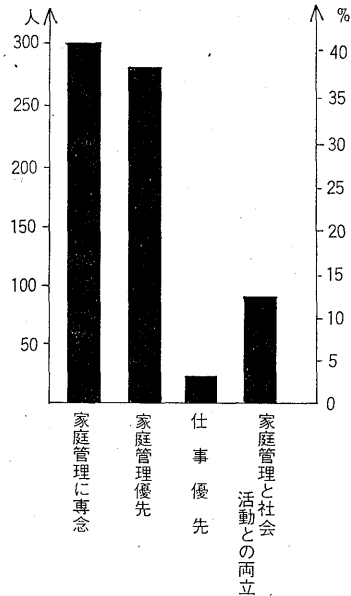
えたものは1割強である。是非就職したいと答えたもの、および就職するつもりはない、と答えたものを「決心組」と呼ぶとすれば、いい職があれば就職したい、と答えたもの、およびまだよく考えていない、と答えたものは、「未決心組」と呼ぶことができよう。低学年のものに未決心組が多いのは当然のことではあるが、3年生、4年生にはいっても未決心組が少なからずいることは注目される（付表63参照）。

結婚については、7割弱の学生が、結婚するつもりだが卒業後にしたい、と答えている。（付表57参照）。しかし、いい人があればすぐにも結婚したい、と答えたものが1割以上いること、またこのなかには、かなりの1年生が含まれていることは特徴的である（付表64参照）。結婚後の生活については、家庭管理に専念する、と答えたものと、仕事と両立させるが、家庭管理の方を優先させる、と答えたものがほぼ同数で、両者を合わせると8割弱になる（図7参照、詳しくは付表58参照）。仕事を優先する、と答えたものは非常に少ない。

就職、結婚、結婚後の生活方針といったものは、いわば生活の「枠組」、あるいは「型」、である。このような「型」、の選択とは別に、彼女らが今後の自分の生活態度として、どのような生き方を選ぼうとしているのか、という問題がある。「今後の暮らし方あるいは生活態度として、どんな方向を考えておられますか」という質問に対して、もっとも多い回答は、他人に迷惑をかけない範囲で、

できるだけ個性的な人生を送りたいという回答である（図8参照）。他人に迷惑をかけない範囲で、という制限があるので、このカテゴリーを選んだものが、平凡な人生を送りたいというカテゴリーを選んだものと、実際の生活の場でどのように異ってくるかは疑問ではあるけれども、多くの学生は、少なくとも意識の上では、一定の枠を認めたくえではあるが、できるだけ個性的に生きたいと望んでいるといえよう。多少冒険しても、自分の可能性を試してみたい

図7 結婚後の生活方針



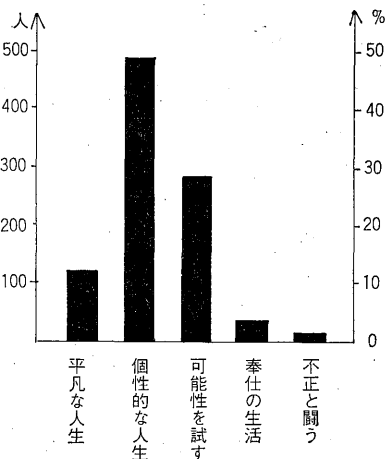
というカテゴリーを選んだものが3割近くいることは注目に価する。しかし、やはり4年生になると、このカテゴリーを選ぶものは少なくなっている（付表62参照）。恵まれない人や困っている人のためにできるだけ働きたいと答えたもの、社会の不正や悪と闘っていきたいと答えたものは、いずれも非常に少ない。これは、今日学生の一般的傾向であるが、逆にいえば、本学学生もその例外ではないことを示しているともいえるであろう。

全体としてみれば、将来の展望に関する学生の態度は、かなり「現実的」であるように思われる。いいかえれば、彼女らの多くは、この点に関しては、社会一般の期待やこれと関連した客観的条件にかなり即応した生き方を選ぼうとしているように思われる。これは、大学批判にみられる彼女らの態度とはやや異っているように思われる。

む す び

今日女子大学は、ある意味で「矛盾の場、であるといえよう。女性に対する伝統的な役割期待は、今日もなお固定性の強い規範の1つであり、女子学生はつねにこれを意識せざるをえない状況にある。一方、大学は、この点に関してつねに何んらかの「革新的機能」をもっている。この機能は、特定の大学の性格とは別に、つまり、その大学が「保守的、な大学であろうと、「革新的、な大学であろうと、「大学文化、あるいは「学生文化、として存在する。「大学が保守的である」といった批判は、まさに、この学生文化から生まれてくるものであるともいえる。それゆえ、女子大学が、女性に関する伝統的な考え方や通念に対して批判的であること、あるいは少なくとも、疑いをもつことは当然のことといえよう。しかし、革新が多くの場合そうであるように、伝統的な女

図8 人生への態度



性観に対する明確なアンティ・テーゼはまったく出されていない。学生の多くが、自分の生き方について模索しているというのが現状であろう。また、大学も、社会一般の通念にはっきりと追従する立場をとっているところは別として、やはり女子教育の意義を十分確立してはいない。

このような状況のなかで、学生の多くは、はっきりとした考えを身につけず、いままで、現実の重みに引きもどされることになる。女性の役割に関する通念を受け入れるか受け入れないかは別として、このような「不本意ながら」あるいは「しかたがないから」受け入れるといった適応の仕方には必然的に何んらかの不安が付きまとう。上にのべたことの中には、この点を暗示するものがある。たとえば、「自分の生き方が誤っているのではないかという不安がある」といった悩みは、この点と無関係ではないと思われる。

もちろん、女性の役割、女子教育のあり方、女子大学の意義といった大きな問題に対して、簡単に結論が出るわけではない。しかし、総じて上のような学生の反応は、ややもすると現状に安住してしまいがちな今日の女子大学の傾向に対して鋭い反省を求めているといえよう。

- 1 池田諭『女子学生の生き方—思想的自立と職業のために』、昭和42年、大和書房。池田諭『女子大学』、昭和41年、43年、日本経済新聞社。柴野昌山「女性の役割と大学教育」、『金城学院大学論集』(34号)、昭和42年。柴野昌山「カレッジ・ソシアリゼーションのもたらす役割葛藤」、『京都大学教育学部紀要』(15号)、昭和44年。
- 2 溝口靖夫・雀部猛利・難波紋吉「キリスト教主義女子大学学生の宗教意識についての実証的研究—その1」、神戸女学院大学論集』(25号)、昭和37年。同その2、同論集(26号)、昭和37年。同その3、同論集(28号)、昭和38年。雀部猛利・溝口靖夫・難波紋吉「キリスト教主義女子大学学生の生活態度における民主化の度合に関する実証的研究—その1」、『神戸女学院大学論集』(25号)、昭和37年。同その2、同論集(26号)、昭和37年。同その3、同論集(28号)、昭和38年。溝口靖夫・茂洋「神戸女学院学生及び生徒の宗教的行為に関する調査」、『神戸女学院大学論集』(36号)、昭和40年。溝口靖夫「学生の宗教意識と教育的環境」、『神戸女学院大学論集』(37号)、昭和41年。溝口靖夫・西山美瑛子・茂洋「神戸女学院学生・生徒の宗教的態度と宗教的準拠集団について」、『神戸女学院大学論集』(38号)、昭和41年。神戸女学院大学社会学研究部『当世女子大生気質—神戸女学院大学を中心として』、昭和36年。
- 3 少し古いだが、本学学生については、雀部・溝口・難波、前掲論文(その3)参照。その他の女子大生については、たとえば、柴野「女性の役割と大学教育」(前掲)参照。
- 4 たとえば、鶴見和子「自己教育の場としての学生運動—上」、『思想の科学』、昭和43年4月号参照。
- 5 神戸女学院大学社会学研究部、前掲報告書。
- 6 溝口・茂、前掲論文。

- 7 池田諭, 『女子大学』(前掲書), またやや古いが, 大学婦人協会編『女子学生はこう考える』, 昭和38年, 大学婦人協会, 参照。
- 8 神戸女学院大学社会学研究部, 前掲報告書。

付記 本報告は, 神戸女学院大学研究所研究助成金による女子大学研究の一部である。調査実施に際しては, 茂洋教授をはじめキリスト教学担当者の御好意を得た。集計に際しては, 多くの職員の方々とりわけ若山晴子助手の助力を得, また, 小林加代子さんをはじめ多くの学生諸君の協力を得た。以上の方々に誌上を借りて, 心から感謝の意を示したい。

付 表

1. 英、社、食、児、音はそれぞれ、文学部英文学科、同学部社会学科、家政学部食物学科、同学部児童学科、音楽学部音楽科を示す。
2. パーセントはイタリックで表わした。パーセントの右肩の※印は、その数値が調整されたものであることを示す。
3. 連記法の場合は期待回答者数をパーセントのベースとした。自由回答法の場合は、回答者数を明記し、これをパーセントのベースとした。なお回答率のパーセントのベースは、期待回答者数である。
4. 表の題目およびカテゴリーの記述を簡単にしたので、精確な内容について末尾の調査票を参照されたい。
5. なおスペース・ファクターを考慮して、表はたて読みとした。

表1 在籍者数・回収票数・回収率

入 学 年 次		英	社	食	児	音	計	回収率
~1967	在 籍 者 数	95	86	33	30	49	293	61.4
	回 収 票 数	69	56	27	17	11	180	
1968	在 籍 者 数	131	117	49	51	48	396	49.2
	回 収 票 数	69	54	10	38	24	195	
1969	在 籍 者 数	113	91	35	27	38	304	73.0
	回 収 票 数	92	58	27	19	26	222	
1970	在 籍 者 数	152	82	51	39	42	366	93.4
	回 収 票 数	146	75	45	36	40	342	
計	在 籍 者 数	491	376	168	147	177	1,359	69.1
	回 収 票 数	376	243	109	110	101	939	
	回 収 率	76.5	64.6	64.8	74.8	57.0	69.1	

単純集計表

表2 父母の有無

父母の有無	人	%
父母とも健在	898	95.7※
父がいない	33	3.5
母がいない	7	0.7
父母ともいない	—	—
不明	1	0.1
計	939	100.0

表3 家計維持者

家計維持者	人	%
父	890	94.8
母	28	3.0
その他	17	1.8
不明	4	0.4
計	939	100.0

表4 家計維持者の職業

職業	人	%
管理的職業	444	47.2
専門的職業	121	12.9
販売・事務	71	7.6
商工自営	226	24.1
その他	32	3.4
不明	45	4.8
計	939	100.0

表5 家族の年収

年 収	人	%
～100万	15	1.6
～200万	195	20.8
～300万	157	16.7
～500万	200	21.3
～1,000万	111	11.8
1,000万以上	26	2.8
不 明	234	25.0※
計	939	100.0

表6 両親の学歴(注)

学 歴	父		母	
	人	%	人	%
初 等 教 育	47	5.0	28	3.0
中 等 教 育	140	14.9	724	77.1
前 期 高 等 教 育	270	28.8	134	14.3
後 期 高 等 教 育	446	47.5	30	3.2
不 明	36	3.8	23	2.4
計	939	100.0	939	100.0

(注) 初 等 教 育＝尋常小学校、高等小学校、新制中学
 中 等 教 育＝旧制中学、旧制高等女学校、旧制実業学校、新制高等学校
 前期高等教育＝旧制高等学校、旧制専門学校、旧制師範学校
 後期高等教育＝旧制大学、新制大学

表7 両親の信仰

信 仰	父		母	
	人	%	人	%
カトリック	4	0.4	10	1.1
プロテスタント	33	3.5	43	4.6
仏 教	301	32.1	287	30.6
そ の 他	10	1.1	27	2.9
と く に な し	555	59.1	593	57.3※
不 明	36	3.8	33	3.5
計	939	100.0	939	100.0

学 科 別 集 計 表

表8 出 身 高 校

出 身 校 種	英	社	食	児	音	計	
神戸女学院中高部	179	89	20	13	21	322	34.8
国 公 立 高 校	149	133	75	92	45	494	52.6
キリスト教主義高校	17	4	4	1	13	39	4.2
その他の私立高校	29	16	10	4	22	81	8.6
不 明	2	1	—	—	—	3	0.3
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表9 信 仰

信 仰	英	社	食	児	音	計	
カトリック	6	2	1	1	6	16	1.7
プロテスタント	35	20	7	4	12	78	8.3
仏 教	13	5	4	3	4	29	3.1
そ の 他	8	3	1	—	—	12	1.3
とくになし	295	191	93	92	72	743	79.1
無 神 論	11	21	2	7	4	45	4.8
不 明	8	1	1	3	3	16	1.7
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表10 大 学 進 学 の 迷 い

進 学 の 迷 い	英	社	食	児	音	計	
非常に迷った	12	5	3	1	2	23	2.4
少し迷った	39	35	21	18	13	126	13.4
迷わなかった	322	202	84	91	86	785	83.7※
不 明	3	1	1	—	—	5	0.5
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表11 大学進学の評価

評 価	英	社	食	児	音	計	
大変よかった	130	51	34	36	33	284	30.2
まあまあよかった	189	154	65	58	53	519	55.3
どちらでもよかった	44	30	9	13	10	106	11.3
進学しない方がよかった	8	3	1	1	1	14	1.5
不明	5	5	—	2	4	16	1.7
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表12 進学してよかった点(注)

よかった点	英	社	食	児	音	計	
自由な時間	72	49	21	19	6	167	26.2
様々の経験	49	36	17	23	7	132	20.7
友人	41	24	14	14	17	110	17.3
資格・職業	6	3	3	—	4	16	2.5
専門知識	47	24	8	9	39	127	19.9
教養	34	23	4	12	6	79	12.4
回答者数・回答率	252	156	85	72	72	637	79.3

(注) 自由記入を分類(複数カテゴリーへの分類を含む)。

表13 大学選択の迷い

選択の迷い	英	社	食	児	音	計	
非常に迷った	107	63	29	22	15	236	25.1
少し迷った	172	114	54	62	56	458	48.8
迷わなかった	87	55	23	24	29	218	23.2
不明	10	11	3	2	1	27	2.9
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表14 他の受験校の有無

他の受験校の有無	英	社	食	児	音	計	
あり	185	142	78	91	24	520	55.4
なし	165	86	28	13	34	326	34.7
不明	26	15	3	6	43	93	9.9
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表15 他の受験校(注)

他の受験校種	英	社	食	児	音	計	
国公立共学	56	33	27	24	2	145	33.6
国公立女子	18	15	15	14	—	62	14.4
キリスト教主義共学	91	60	12	22	1	186	43.2
キリスト教主義女子	23	10	11	17	1	62	14.4
その他の私立共学	42	32	5	2	16	97	22.5
その他の私立女子	17	17	14	18	—	66	15.3
回答者数・回答率	163	117	60	72	19	431	82.9
受験校数/回答者数	1.5	1.4	1.4	1.3	1.1	1.1	

(注) 記入された大学名を分類。

表16 本学の志望順位

志望順位	英	社	食	児	音	計	
第1志望	59	33	13	30	17	152	35.3
第2志望	61	44	31	18	2	156	36.2
第3志望以下	36	36	14	21	—	107	24.8
不明	7	4	2	3	—	16	3.7
計	163	117	60	72	19	431	100.0

表17 本学選択の際の誘因（注）

誘 因	英	社	食	児	音	計
女子大学であること	38	27	35	29	3	132 14.1
キリスト教主義であること	26	26	5	11	10	78 8.3
小規模であること	74	62	41	32	31	240 25.6
国際的雰囲気があること	44	21	6	2	3	76 8.1
世間での評判が高いこと	118	72	41	40	30	301 32.1
学問的水準が高いこと	67	15	8	9	16	115 12.1
結婚に有利であること	24	13	8	11	7	63 6.7
推薦入学できること(中高部から)	137	78	18	11	6	250 26.6
試験科目が少ないこと	52	27	9	16	27	131 14.0
学力が相応であること	85	65	26	38	22	236 25.1
安心感があること	63	34	11	12	15	135 14.4
建物や環境がよいこと	144	98	47	46	44	379 40.4
通学に便利であること	73	51	26	20	29	199 21.2
そ の 他	58	41	20	25	34	178 19.0
パーセントのベース	376	243	109	110	101	939

（注）無制限連記法による。

表18 本学選択の際のマイナスの要因（注）

マイナスの要因	英	社	食	児	音	計
女子大であること	140	83	23	24	30	300 52.2
経費のかかること	39	31	14	21	8	113 19.7
希望の学科のないこと	23	12	12	9	1	57 9.9
回 答 者・回 答 率	258	156	61	55	45	575 61.2

（注）自由回答を分類（複数カテゴリーへの分類を含む）。

表19 本学入学の評価

評 価	英	社	食	児	音	計
大変よかった	32	13	16	16	16	93 9.9
まあまあよかった	152	111	49	47	46	405 43.1
他の大学でもよかった	97	72	21	26	23	239 25.5
他の大学の方がよかった	85	44	20	20	10	179 19.1
不 明	10	3	3	1	6	23 2.4
計	376	243	109	110	101	939 100.0

表20 本学入学に対する父親の態度

父 の 態 度	英	社	食	児	音	計
積極的にすすめた	114	82	25	30	26	277 29.5
賛成した	167	88	47	45	49	396 42.2
中 立	79	58	26	21	23	207 22.0
反 対	5	6	5	6	3	25 2.7
不 明	11	9	6	8	—	34 3.6
計	376	243	109	110	101	939 100.0

表21 本学入学に対する母親の態度

母 の 態 度	英	社	食	児	音	計
積極的にすすめた	151	100	36	40	46	373 39.7
賛成した	156	102	49	50	42	399 42.5
中 立	55	35	18	17	11	136 14.5
反 対	5	4	3	2	1	15 1.6
不 明	9	2	3	1	1	16 1.7
計	376	243	109	110	101	939 100.0

表22 本学入学に対する父親の賛成理由 (注)

父の賛成理由	英	社	食	児	音	計	
女子大だから	49	33	15	14	8	119	21.8
評判がよいから	69	46	19	23	8	165	30.2
安心だから	34	13	7	3	3	60	11.0
キリスト教主義だから	4	4	3	0	2	13	2.4
回答者数・回答率	218	134	55	75	65	547	81.3

(注) 自由回答を分類 (複数カテゴリーへの分類を含む)。

表23 本学入学に対する母親の賛成理由 (注)

母の賛成理由	英	社	食	児	音	計	
女子大だから	45	21	17	12	6	101	15.3
評判がよいから	99	59	18	26	8	210	31.8
安心だから	45	18	6	4	3	76	11.5
キリスト教主義だから	6	4	1	3	3	17	2.6
回答者数・回答率	244	156	85	90	69	644	83.4

(注) 自由回答を分類 (複数カテゴリーへの分類を含む)。

表24 授業出席の程度

欠席の程表	英	社	食	児	音	計	
ほとんど欠席しない	127	71	52	53	21	324	34.5
欠席は10回に1度位	140	88	47	40	43	358	38.1
欠席は5回に1度位	83	66	9	13	31	202	21.5
欠席は3回に1度位	18	15	1	4	6	44	4.7
それ以上	1	2	—	—	—	3	0.3
不明	7	1	—	—	—	8	0.9
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表25 授業に関連した勉強時間（1日平均）

勉強時間	英	社	食	児	音	計	
ほとんどしない	50	80	42	27	4	203	21.6
30分～1時間	112	73	49	56	6	296	31.5
1～2時間	137	68	17	21	24	267	28.4
2～3時間	58	14	1	3	37	113	12.0
3～4時間	11	3	—	2	25	41	4.4
4時間以上	3	2	—	1	5	11	1.2
不明	5	3	—	—	—	8	0.9
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表26 授業に直接関係しない読書時間（1日平均）

読書時間	英	社	食	児	音	計	
ほとんど読まない	44	19	9	14	22	108	11.5
30分～1時間	185	126	65	53	60	489	52.0※
1～2時間	99	67	20	32	13	231	24.6
2～3時間	30	22	10	7	6	75	8.0
3～4時間	6	5	1	3	—	15	1.6
4時間以上	3	2	3	1	—	9	1.0
不明	9	2	1	—	—	12	1.3
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表27 授業に対する満足度

満足度	英	社	食	児	音	計	
非常に満足	1	1	—	1	1	4	0.4
だいたい満足	35	16	4	5	7	67	7.1
どちらかといえば満足	74	44	28	30	26	202	21.5
やや不満	170	139	56	44	53	462	49.3※
非常に不満	87	39	19	27	13	185	19.7
不明	9	4	2	3	1	19	2.0
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表28 礼拝出席の程度

礼拝出席	英	社	食	児	音	計	
週4～5回	8	3	3	1	3	18	1.9
週3～4回	39	7	4	12	2	64	6.8
週1～2回	58	27	34	29	21	169	18.0
月に1・2回	89	57	24	19	39	228	24.3
4月以来1・2回	122	85	31	34	32	304	32.3※
1度も出たことがない	55	64	12	13	4	148	15.8
不明	5	—	1	2	—	8	0.9
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表29 教会出席の程度

日曜礼拝出席	英	社	食	児	音	計	
ほとんど毎週出席する	17	10	1	3	10	41	4.4
よく出席する	5	3	3	1	1	13	1.4
時々出席する	60	29	18	20	14	141	15.0
ぜんぜん出席しない	292	199	87	86	76	740	78.8
不明	2	2	—	—	—	4	0.4
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表30 ひとりで聖書を読む程度

聖書を読む程度	英	社	食	児	音	計	
ほとんど毎日読む	3	4	1	—	5	13	1.4
よく読む	10	3	—	2	5	20	2.1
時々読む	150	88	50	33	37	358	38.1
読まない	207	147	58	73	52	537	57.2
不明	6	1	—	2	2	11	1.2
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表31 生活の重点(注)

生活の重点	英	社	食	児	音	計	
専門の勉強	86	34	20	20	93	253	26.9
広い意味での勉強	226	135	61	62	42	526	56.0
自治会・クラブ	130	106	52	33	5	326	34.7
教会	8	5	1	6	1	21	2.2
奉仕活動	16	15	4	10	4	49	5.2
社会・政治活動	1	3	1	0	2	7	0.7
けいこごと	101	80	42	37	11	271	28.9
その他	46	42	14	12	5	119	12.7
とくになし	51	24	10	16	1	102	10.9
パーセントのベース	376	243	109	110	101	939	

(注) 制限連記法による。

表32 本学での友人

よい友人がえられたか	英	社	食	児	音	計	
非常によい友達がえられた	155	78	34	33	29	329	35.0
比較的よい友達がえられた	173	131	65	64	56	489	52.1
あまりよい友達がえられなかった	35	21	7	8	14	85	9.1
全く友達がえられなかった	6	4	3	3	1	17	1.8
不明	7	9	—	2	1	19	2.0
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表33 本学での友人の影響

友人の影響	英	社	食	児	音	計	
大いにある	96	48	20	18	18	200	21.3
少しはある	214	151	75	65	56	561	59.7
ない	62	44	13	25	25	169	18.0
不明	4	—	1	2	2	9	1.0
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表34 本学の友人との話題 (注)

友人との話題	英	社	食	児	音	計	
趣味のこと	130	93	46	38	27	334	35.6
服装や化粧のこと	139	76	35	36	26	312	33.2
勉強のこと	191	107	41	33	63	435	46.3
大学のこと	165	108	52	42	24	391	41.6
社会・政治問題	29	34	4	7	5	79	8.4
異性のこと	203	90	53	56	46	448	47.7
人 生	165	95	43	48	37	388	41.3
信 仰	12	10	3	5	10	40	4.3
世 間 話	142	114	47	47	36	386	41.1
ス ポ ー ツ	57	33	15	6	2	113	12.0
食べ物のこと	94	72	39	31	17	253	26.9
ショッピングのこと	59	33	21	24	11	148	15.8
パーセントのベース	376	243	109	110	101	939	

(注) 無制限連記法による。

表35 教師とのパーソナルな接触

教師との接触	英	社	食	児	音	計	
よくある	28	9	5	3	18	63	6.7
1・2度ある	99	71	36	23	32	261	27.8
ない	243	163	68	83	49	606	64.5
不明	6	—	—	1	2	9	1.0
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表36 勉強以外のことでの教師との接触希望

教師との接触希望	英	社	食	児	音	計	
希望する	256	174	78	75	74	657	70.0
希望しない	107	67	30	34	24	262	27.9
不明	13	2	1	1	3	20	2.1
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表37 教師の影響

教師の影響	英	社	食	児	音	計	
大いにある	38	13	9	6	8	74	7.9
少しはある	193	107	55	47	56	458	48.8
ない	138	117	45	55	36	391	41.6
不明	7	6	—	2	1	16	1.7
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表38 もっとも影響を受けている人

影響を受けている人	英	社	食	児	音	計	
親	99	70	43	36	30	278	29.6
兄 姉	12	10	10	9	5	46	4.9
友人	135	88	37	37	27	324	34.7※
先輩	7	4	2	2	5	20	2.1
教会の牧師	1	1	—	—	1	3	0.3
教師	15	2	2	1	3	23	2.4
その他	30	19	5	6	8	68	7.2
不明	77	49	10	19	22	177	18.8
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表39 大学の意義—第1位にあげられたもの(注)

大学の意義	英	社	食	児	音	計	
専門知識・技術の習得	110	34	29	32	68	273	29.1
基礎的なものの考え方の養成	78	68	20	25	7	198	21.1
広い教養・知識の吸収	97	91	35	28	11	262	27.9
交友・経験の拡大	74	41	25	21	12	173	18.4
資格・免状	7	3	—	3	1	14	1.5
職業への準備	3	2	—	—	—	5	0.5
不明	7	4	—	1	2	14	1.5
計	376	243	109	110	101	939	100.0

(注) 順序づけ法による。

表40 大学の意義—第2位にあげられたもの

大学の意義	英	社	食	児	音	計	
専門知識・技術の習得	53	34	14	17	13	131	14.0
基礎的なものの考え方の養成	81	50	16	16	15	178	19.0
広い教養・知識の吸収	112	68	42	40	28	290	30.8※
交友・経験の拡大	96	69	32	26	27	250	26.6
資格・免状	11	6	1	2	2	22	2.3
職業への準備	19	9	4	7	15	54	5.8
不明	4	7	—	2	1	14	1.5
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表41 大学の意義—第3位にあげられたもの

大学の意義	英	社	食	児	音	計	
専門知識・技術の習得	68	51	21	20	11	171	18.2
基礎的なものの考え方の養成	83	63	36	29	16	227	24.3※
広い教養・知識の吸収	88	47	17	19	31	202	21.5
交友・経験の拡大	76	55	23	24	25	203	21.6
資格・免状	18	9	7	6	10	50	5.3
職業への準備	37	11	4	10	7	69	7.3
不明	6	7	1	2	1	17	1.8
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表42 女子大学の必要性

女子大学の必要性	英	社	食	児	音	計	
必要である	23	18	11	14	6	72	7.7
あった方がよい	120	68	38	42	33	301	32.1
あってもなくてもよい	158	106	39	31	37	371	39.4※
必要ない	64	46	16	22	22	170	18.1
不明	11	5	5	1	3	25	2.7
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表43 本学は花嫁学校か

本学=花嫁学校	英	社	食	児	音	計	
ズバリ当てはまる	64	51	26	28	23	192	20.4
当てはまる点が多い	225	155	65	68	62	575	61.8※
あまり当てはまらない	80	34	18	12	13	157	16.7
不 明	7	3	—	2	3	15	1.6
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表44 本学は花嫁学校でよいか

花嫁学校でよいか	英	社	食	児	音	計	
よくないから改める	106	90	39	43	30	308	40.2
残念だがしかたがない	125	91	37	41	36	330	43.0
それ で よ い	46	21	12	11	13	103	13.4
不 明	12	4	3	1	6	26	3.4
計	289	206	91	96	85	767	100.0

表45 女子大学の長所の有無

女子大学の長所の有無	英	社	食	児	音	計	
あ り	220	153	73	78	59	583	62.1
な し	137	83	36	31	41	328	34.9
不 明	19	7	—	1	1	28	3.0
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表46 女子大学の長所(注)

女子大学の長所	英	社	食	児	音	計	
異性にわずらわされない	57	41	24	18	13	153	26.2
女性としての能力をのばすことができる	69	52	29	27	24	201	34.5
家庭的で、静かな雰囲気がある	100	76	30	41	30	277	47.5
異性に依存せず、独立心を養える	46	42	17	20	12	137	23.5
パーセントのベース	220	153	73	78	59	583	

(注) 無制限連記法による。

表47 女子大学の短所の有無

女子大学の短所の有無	英	社	食	児	音	計	
あり	347	233	107	107	96	890	94.8
なし	8	5	1	1	3	18	1.9
不明	21	5	1	2	2	31	3.3
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表48 女子大学の短所(注)

女子大学の短所	英	社	食	児	音	計	
視野が狭くなる	286	186	80	80	77	709	79.7
意欲に欠け、活気が足りない	210	152	73	64	65	564	63.4
異性に対して認識不足になる	134	64	31	36	31	296	33.3
学問研究の意欲をみせない	96	96	35	42	36	305	34.3
社会・政治問題を敬遠しがち	222	143	75	73	64	577	64.8
学問が保守的、教育方針も保守的	188	137	51	66	51	493	55.4
パーセントのベース	347	233	107	107	96	890	

(注) 無制限連記法による。

表49 本学の「良い点」の有無(注)

良い点の有無	英	社	食	児	音	計	
あり	249	163	69	79	75	635	67.7
なし	52	29	11	11	10	113	12.0
不明	75	51	29	20	16	191	20.3
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表50 本学の「悪い点」の有無

悪い点の有無	英	社	食	児	音	計	
あり	294	195	82	88	78	737	78.5
なし	14	4	4	3	3	28	3.0
不明	68	44	23	19	20	174	18.5
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表51 本学の「良い点」(注)

本学の良い点	英	社	食	児	音	計	
環境が良い	115	89	27	26	33	290	45.7
小規模である	50	40	24	25	22	161	25.4
雰囲気が良い	31	31	16	23	12	113	17.8
学生の質がよい	34	9	5	7	8	63	9.9
キリスト教にふれることができる	24	15	9	7	7	62	9.8
建物が美しい	13	8	2	8	12	43	6.8
女子大としてのよさがある	17	4	1	6	5	33	5.2
良い友人を得られる	7	12	4	4	4	31	4.9
学風が良い(アカデミック・伝統)	8	2	3	6	1	20	3.1
学生の自由尊重	8	8	0	2	1	19	3.0
教師学生の交流がある	10	4	0	0	2	16	2.5
女子大臭がない	7	6	1	0	2	16	2.5
自己の可能性を追求できる	11	2	0	1	0	14	2.2
英語教育がすぐれている	10	0	0	0	0	10	1.6
国際的雰囲気がある	7	1	2	0	0	10	1.6
教師がよい	4	4	1	0	1	10	1.6
回答者数	249	163	69	79	75	635	

(注) 自由回答を分類(複数カテゴリへの分類を含む)。

表52 本学の「悪い点」(注)

本学の悪い点		英	社	食	児	音	計	
本学全般について	保守的	86	54	13	22	18	193	26.2
	学生の自主性を制限	40	15	10	19	8	92	12.5
	学問追求の厳しき欠如	33	23	11	11	4	82	11.1
	活気なし	27	28	11	9	9	84	11.4
	女子大特有の欠点	32	14	3	7	6	62	8.4
	厚生施設の不備	17	10	7	9	1	44	6.0
	教師学生の交流乏しい	15	12	5	6	5	43	5.8
	キリスト教主義の形式化	16	4	4	3	7	34	4.6
	事なかれ主義	9	2	12	5	4	32	4.3
	授業料が高い	6	11	5	8	2	32	4.3
	現実社会から遊離	15	3	5	3	5	31	4.2
建学精神と現実のギャップ	9	0	0	3	10	22	3.0	
高校の延長	15	1	0	5	0	21	2.8	
人間としてでなく女性として見る	4	11	1	1	1	18	2.4	
教育内容について	優れた教授が少ない	36	12	6	14	17	85	11.5
	カリキュラムの不満	31	25	4	18	3	81	11.0
	授業内容の不満	21	4	7	19	5	56	7.6
	教育研究設備不備	10	16	5	8	4	43	5.8
	専任教員の数が少ない	16	8	1	7	2	34	4.6
	厳しすぎる(形式主義)	17	0	3	7	0	27	3.7
	出席をとることへの不満	13	1	1	6	0	21	2.8
教員に対するその他の不満	9	3	0	1	0	13	1.8	
学生について	自己中心的(利己的)	25	15	7	4	2	53	7.2
	無気力	21	2	8	4	8	43	5.8
	学習意欲に欠ける	12	19	4	3	4	42	5.7
	視野が狭い	19	9	3	4	4	39	5.3
	政治・社会に無関心	16	4	10	4	2	36	4.9
	プライドが高い	10	6	3	4	2	25	3.4
	学生間の交流がない	4	5	2	7	2	20	2.7
	考え方が甘い	11	5	0	0	3	19	2.6
クラブ活動に消極的	10	4	1	3	0	18	2.4	
回答者数	294	195	82	88	78	737		

(注) 自由回答を分類(複数カテゴリーへの分類を含む)。

表53 女性向きの大学教育の有無

女性向きの 大学教育の有無	英	社	食	児	音	計	
あ る	192	71	41	42	34	380	40.5
全くないとはいえない	115	129	57	54	51	406	43.2
な い	5	34	8	11	7	65	6.9
不 明	64	9	3	3	9	88	9.4
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表54 女性向きの職業の有無

女性向きの 職業の有無	英	社	食	児	音	計	
あ る	303	205	91	99	85	783	83.4
全くないとはいえない	55	30	17	8	12	122	13.0
な い	5	5	1	2	1	14	1.5
不 明	13	3	—	1	3	20	2.1
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表55 今後の生活態度

今後の生活態度	英	社	食	児	音	計	
平凡な生活	49	30	13	21	9	122	13.0
個性的な生活	206	118	56	50	47	477	50.8
可能性を試す	109	78	35	24	31	277	29.5
奉仕の生活	2	9	5	9	8	33	3.5
不正と闘う生活	1	3	—	1	1	6	0.6
不 明	9	5	—	5	5	24	2.6
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表56 就職についての希望

就職についての希望	英	社	食	児	音	計	
是非就職したい	113	89	33	44	23	302	32.3※
いい職があれば就職したい	134	78	29	30	29	300	31.9
まだよく考えていない	52	29	17	18	28	144	15.3
就職するつもりはない	52	24	25	8	20	129	13.7
もう就職が決まっている	16	17	5	7	—	45	4.8
不明	9	6	—	3	1	19	2.0
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表57 結婚についての希望

結婚についての希望	英	社	食	児	音	計	
いい人がいれば、すぐにでも	42	30	15	10	9	106	11.3
卒業後に結婚する	262	155	71	82	71	641	68.2※
結婚するつもりはない	9	10	2	1	5	27	2.9
よくわからない	56	46	21	13	15	151	16.1
不明	7	2	—	4	1	14	1.5
計	376	243	109	110	101	939	100.0

表58 結婚後の生活方針

結婚後の生活方針	英	社	食	児	音	計	
家庭管理に専念	126	75	35	45	16	297	39.7
仕事より家庭管理を優先	115	60	25	29	56	285	38.2
仕事優先	9	6	3	1	4	23	3.1
家庭と社会活動・奉仕の両立	33	28	15	14	3	93	12.4
不明	21	16	8	3	1	49	6.6
計	304	185	86	92	80	747	100.0

表59 悩 み (注)

悩 み	英	社	食	児	音	計
自分や家族の身体が丈夫でない	37	19	9	9	6	80 8.5
毎日の生活にはりがない	152	104	52	56	26	390 41.5
経済的に不安がある	20	7	2	1	1	31 3.3
自由になる時間が少ない	116	36	27	24	22	225 24.0
打ち明けて話せる友人がいない	24	19	13	8	7	71 7.6
成績が、かんばしくない	32	4	2	3	10	51 5.4
愛 情 問 題	71	30	11	21	17	150 16.0
親が理解してくれない	55	19	12	6	9	101 10.8
自分の生き方への不安	133	103	42	39	51	368 39.2
容姿がすぐれない	27	21	7	13	6	74 7.9
勉強が面白くない	81	39	21	17	9	167 17.8
信 仰 上 の 問 題	9	8	2	4	9	32 3.4
人生に希望がもてない	45	29	15	7	14	110 11.7
恋 人 が い な い	37	25	10	13	10	95 10.1
パーセントのベース	376	243	109	110	101	939

(注) 無制限連記法による。

表60 支 持 政 党

支 持 政 党	英	社	食	児	音	計
自 民 党	44	25	11	7	15	102 10.9
社 会 党	25	12	3	9	8	57 6.1
民 社 党	17	21	6	10	5	59 6.3
共 産 党	8	5	—	—	1	14 1.5
公 明 党	1	—	—	—	—	1 0.1
な し	260	175	84	80	69	668 71.1
不 明	21	5	5	4	3	38 4.0
計	376	243	109	110	101	939 100.0

表61 新左翼への態度

新左翼への態度	英	社	食	児	音	計	
大いに共感する	7	9	—	2	2	20	2.1
共感する点がある	121	80	26	42	31	300	31.9
あまり共感を覚えない	164	99	57	44	41	405	43.2%
反感を感じる	39	39	17	19	17	131	14.0
不明	45	16	9	3	10	83	8.8
計	376	243	109	110	101	939	100.0

学 年 別 集 計 表

表62 今後の生活態度

今後の生活態度	1年生	2年生	3年生	4年生	計	
平凡な生活	41	26	29	26	122	13.0
個性的な生活	170	112	89	106	477	50.8
可能性を試す	105	71	59	42	277	29.5
奉仕の生活	13	6	9	5	33	3.5
不正と闘う生活	2	2	1	1	6	0.6
不明	11	5	8	—	24	2.6
計	342	222	195	180	939	100.0

表63 就職についての希望

就職についての希望	1年生	2年生	3年生	4年生	計	
是非就職したい	131	73	66	32	302	32.3※
いい職があれば就職したい	93	83	75	49	300	31.9
まだよく考えていない	63	39	30	12	144	15.3
就職するつもりはない	44	23	22	40	129	13.7
もう就職がきまっている	—	1	—	44	45	4.8
不明	11	3	2	3	19	2.0
計	342	222	195	180	939	100.0

表64 結婚についての希望

結婚についての希望	1年生	2年生	3年生	4年生	計	
いい人がいれば、すぐにでも	31	27	22	26	106	11.3
卒業後に結婚する	228	146	140	127	641	68.2※
結婚するつもりはない	12	5	6	4	27	2.9
よくわからない	64	42	23	22	151	16.1
不明	7	2	4	1	14	1.5
計	342	222	195	180	939	100.0

表65 結婚後の生活方針

結婚後の生活方針	1年生	2年生	3年生	4年生	計	
家庭管理に専念	106	77	59	55	297	39.7
仕事より家庭管理を優先	98	62	66	59	285	38.2
仕事優先	9	6	3	5	23	3.1
家庭と社会活動・奉仕の両立	28	20	19	26	93	12.1
不明	18	8	15	8	49	6.6
計	259	173	162	153	747	100.0

4. あなたは、大学の選択に迷われましたか。

- イ 非常に迷った ロ 少し迷った ハ 迷わなかった

5. 本大学の他に受験された大学がありますか。「ある」場合は、さしつかえのない限り、大学名を書いて下さい。

イ ある (大学名) _____

ロ なし

6. 上の質問で、イに○された方におたずねします。本学は、第何志望でしたか。

- イ 第一志望 ロ 第二志望 ハ 第三志望 ニ それ以下

7. 本学に入学されたのは、どのような理由からですか。入学の決心にプラスに働いたと思われる要因を下の項目からいくつでも選んで、その記号を○で囲んで下さい。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| イ 女子大学だから | ロ キリスト教主義大学だから |
| ハ 小規模だから | ニ 国際的雰囲気豊かなから |
| ホ 世間での評判がよいから | ヘ 学問的水準が高いから |
| ト 結婚に有利だから | チ 推薦入学できたから |
| リ 試験科目が少なかったから | ヌ 学力が相応だから |
| ル 親しみやすく、安心感があつたから | オ 建物や環境がよいから |
| ワ 通学に便利だから | カ その他 (具体的に書いて下さい) |

8. では逆に、入学を決心する際に、マイナスに働いた要因をあげて下さい。特になかった場合は、「なし」とその旨を書いて下さい(自由記入)。

9. 大学に入学されたことを、今考えて、よかったとお考えですか。

- イ 大変よかったと思う ロ まあ、まあよかったと思う
ハ 他の大学でもよかったと思う ニ 他の大学の方がよかったと思う

10. あなたが本学に入学されることについて、御両親はどんな御意見でしたか。

- | | |
|----------------|----------------|
| 父 イ 積極的に勧めた | 母 イ 積極的に勧めた |
| ロ 賛成してくれた | ロ 賛成してくれた |
| ハ 賛成でも反対でもなかった | ハ 賛成でも反対でもなかった |
| ニ 反対 | ニ 反対 |

11. 上の質問で、イ・ロ・ニのいずれかに○された方におたずねします。

御両親が賛成、或いは反対された理由を書いて下さい(自由記入)。

父 (賛成あるいは反対の理由)

母 (賛成あるいは反対の理由)

1. あなたは、最近大学での授業に、平均してどれ位出席しておられますか。欠席率から考えてみて下さい。

- イ 欠席したことは、ほとんどない ロ 欠席は10回に1度位
 ハ 欠席は5回に1度位 ニ 欠席は3回に1度位
 ホ それ以上

2. あなたは大学での授業に関係した勉強を、1日平均何時間位しておられますか。

- イ 殆んどしない ロ 30分～1時間 ハ 1～2時間
 ニ 2～3時間 ホ 3～4時間 ヘ 4時間以上

3. あなたは、本学図書館から、月平均何冊位本を借りられますか。

大学での授業に関係した本と、大学の授業とは直接関係のない本とに分けて、答えて下さい。殆んど借りない場合は、ゼロとして記入して下さい。

- | | |
|-------------|---|
| 授業に関係した本 | 冊 |
| 授業と直接関係のない本 | 冊 |

4. あなたは、大学での授業に直接関係のない本を、1日平均何時間位読まれますか。

- イ 殆んど読まない ロ 30分～1時間 ハ 1～2時間
 ニ 2～3時間 ホ 3～4時間 ヘ 4時間以上

5. あなたは、大学での授業にどの程度満足しておられますか。

- イ 非常に満足 ロ だいたい満足 ハ どちらかといえば満足
 ニ やや不満 ホ 非常に不満

6. あなたは、今年の4月以来、大学での礼拝に平均どの程度出席しておられますか。

- イ 週4～5回 ロ 週3～4回 ハ 週1～2回位
 ニ 月に1.2度 ホ 4月以来1.2度 ヘ 一度も出たことがない

7. 今年の4月以来の礼拝の話の中で、あなたの印象に残っているものがありますか。

- イ ある ロ ない

8. 上の質問でイに○された方にたずねます。『印象に残った話』とは、たとえばどの様な内容の話ですか（自由記入）。

9. あなたは、日曜日に教会に行かれますか。

- イ 殆んど毎週出席する ロ 毎週とはいえないがだいたい出席する
 ハ 時々出席する ニ ぜんぜん出席しない

10. あなたは、自分一人で聖書を読まれることがありますか。

- イ 殆んど毎日読む ロ 毎日というほどではないが、よく読む
 ハ 時々読む ニ ひとりで読むことはない

11. あなたは自分の生活の中で、どんな方面にとくに力を入れておられますか。下の項目から2, 3選んで下さい。
- イ 専門の勉強 ロ 広い意味での勉強 ハ 大学自治会
 ニ クラブ、同好会（運動系） ホ クラブ、同好会（文化系） ヘ 宗教活動（学内）
 ト 教会 チ 奉仕活動 リ 社会政治運動
 ヌ けいごごと ル その他（具体的に書いて下さい）
 ラ とくになし
-
12. あなたの友達には、本学での友達と、それ以外の友達と、どちらが多いですか。
- イ 本学での友達がほとんど ロ 本学での友達の方が、どちらかといえば多い
 ハ 本学以外での友達の方がどちらかといえば多い ニ 本学以外での友達がほとんど
 ホ 友達といえる人はいない
13. あなたの本学での友達には、大学に入学する前からの友達が多いですか、それとも入学後にできた友達が多いですか。
- イ 入学前からの友達が多い ロ 入学後にできた友達が多い
14. あなたは、本学での友達とどんなことをよく話しますか。2, 3選んで下さい。
- イ 趣味のこと ロ 服装や化粧のこと ハ 勉強のこと
 ニ 大学のこと ホ 社会政治問題 ヘ 異性のこと
 ト 人生 チ 信仰 リ 世間話
 ヌ スポーツ ル 食物のこと ラ ショッピングのこと
15. あなたは、本学では、よい友達がえられたと思いますか。
- イ 非常によい友達がえられた ロ 比較的よい友達がえられた
 ハ あまりよい友達がえられなかった ニ 全く友達がえられなかった
16. あなたは、人生に関して、またものの考え方に関して、本学での友達から影響を受けたことがありますか。
- イ 大いにある ロ 少しはある ハ ない
17. あなたは、今年の4月以来、勉強以外のことで、教師と個人的に話しをされたことがありますか。
- イ よくある ロ 1, 2度ある ハ ない
18. あなたは勉強以外のことで、もっと教師と接触したいと思われませんか。
- イ 思う ロ 思わない
19. あなたは、人生に関して、またものの考え方に関して、本学の教師から影響を受けたことがありますか。
- イ 大いにある ロ 少しはある ハ ない
20. あなたは、人生に関して、またものの考え方に関して、どんな人々あるいはグループから最も影響を受けていると思われませんか。1つ選んで下さい。
- イ 親 ロ 兄・姉 ハ 友達
 ニ 先輩 ホ 教会の牧師 ヘ 教師
 ト その他（具体的に書いて下さい）
-

1. あなたは、大学の意義をどこに認められますか。イ～ヘを、重要だと考えられるものから順に並べて下さい。

- | | | | |
|---|-----------------|---|-----------------------|
| イ | 専門的知識・技術を修得すること | ロ | 基礎的なものの考え方を養うこと |
| ハ | 広い教養、知識を身につけること | ニ | いろいろな人と交わり、経験を広めること |
| ホ | 資格、免許をえること | ヘ | 自分に適した職業につくための準備をすること |
1. 2. 3. 4. 5. 6. (記号を入れて下さい)

2. あなたは、女子大学は、現在必要だと思われますか。

- イ 必要である ロ あった方がよい ハ あってもなくてもよい
ニ 必要でない

3. 上の質問についてのあなたの回答の理由を書いて下さい(自由記入)。

4. 「女子大学は花嫁大学である」とよくいわれますが、あなたは、本学もこれに当てはまると思われますか。

- イ ズバリ当てはまると思う ロ 当てはまる点が多い
ハ あまり当てはまらないと思う

5. 上の質問で、イ・ロのいずれかに○された方におたずねします。あなたは、そのことをどう思われますか。

- イ よくないことだから、改めていくべきだと思う
ロ 残念であるが、しかたがないと思う
ハ それでよいと思う

6. あなたは、「女子大学の現実的な長所」といったものがあると思われますか。

- イ ある ロ ない

7. 上の質問で、イに○された方におたずねします。「女子大学の現実的な長所」は、どんな点にあるとお考えですか。いくつでも選んで下さい。

- イ 異性にわずらわされない ロ 女性としての能力・特性をのばすことができる
ハ 家庭的で、静かな雰囲気がある ニ 異性に依存せず、独立心を養える
ホ その他(具体的に書いて下さい)

8. あなたは「女子大学に固有な短所」といったものがあると思われますか。

- イ ある ロ ない

9. 上の質問で、イに○された方におたずねします。「女子大学に固有な短所」は、どんな点にあるとお考えですか。

- イ 視野が狭くなる ロ 意欲に欠け、活気が足りない
ハ 異性に対して認識不足になる ニ 学問研究の意欲をみせない
ホ 社会・政治問題を敬遠しがち ヘ 学問が保守的、教育方針も保守的になる
ト その他(具体的に書いて下さい)

5. あなたは、今後の暮らし方あるいは生活態度として、どんな方向を考えておられますか。次のイ～ホのうち、あなたの現在の気持ちにいちばん近いものを1つ選んで下さい。

イ 他人に迷惑をかけず、平凡な人生を送りたい
ロ 他人に迷惑をかけない範囲で、できるだけ個性的な人生を送りたい
ハ 多少冒険をしても、自分の可能性をためしてみたい
ニ 恵まれない人や困っている人の為になんかだけ働きたい
ホ 社会の不正や悪と闘っていきたい

6. あなたは、卒業後の就職についてどうお考えですか。イ～ホから1つ選んで、記号を○で囲んで下さい。

イ ぜひ就職したい
ロ いい職があれば働きたい
ハ まだよく考えていない
ニ 就職するつもりはない
ホ もう就職が決まっている

7. あなたは、御自身の結婚についてどうお考えですか。イ～ニから1つ選んで、記号を○で囲んで下さい。

イ いい人があれば、すぐにでも結婚したい
ロ 結婚するつもりだが、卒業後にしたい
ハ 結婚するつもりはない
ニ よくわからない

8. 上の質問で、イ、ロのいずれかに○された方におたずねします。結婚後のあなたの生活として、次のイ～ハのうち、どれを選ばれますか。ただしロを選ばれた方は、さらにa、bのいずれかを選んで、記号を○で囲んで下さい。

イ 家庭生活の管理に専念する
ロ 仕事・職業と家庭生活とを両立させる
a 家庭生活を優先
ハ 家庭生活と社会活動・奉仕活動を両立させる
b 仕事、職業を優先

9. 毎日の生活の中で、あなたが悩んでいることは、どういうことですか。イ～ヨから、いくつでも選んで下さい。

イ 自分や家族の身体が丈夫でない
ロ 毎日の生活にはりがない
ハ 経済的不安がある 争とりがない
ニ 自由になる時間が少ない
ホ 打ち明けて話せる友人がいない
ヘ 成績が、かンばしくない
ト 愛情問題
チ 親が理解してくれない
リ 自分の生き方が誤っているのではないかという不安がある
ヌ 容姿がすぐれていない
ル 勉強が面白くない
ヲ 信仰上の問題
ワ 人生に希望がもてない
カ 恋人がいない
ヨ その他(具体的に書いて下さい)

10. 上の質問で○されたことについて、とくに理由があれば、書いて下さい(自由記入)。

1.1. あなたは、現在の社会、政治問題の中で、何に一番関心がありますか（自由記入）。

1.2. あなたは、現在の、わが国の政党のうち、どの政党を支持されますか。

- イ 自民党 ロ 社会党 ハ 民社党 ニ 共産党 ホ 公明党
ヘ 支持する政党なし

1.3. あなたは、現在の“新左翼”の運動をどう思われますか。

- イ 大いに共感を覚える ロ 共感する点がある
ハ あまり共感を覚えない ニ 反発を感じる

— 以 上 —